

令和7年産 コメ通信

第7号（令和7年7月15日）

【発行】
北秋田地域振興局農林部農業振興普及課
（電話：0186-62-1835）

草丈長く、茎数少ない！生育に応じた追肥と水管理を！

1 気象経過と生育状況

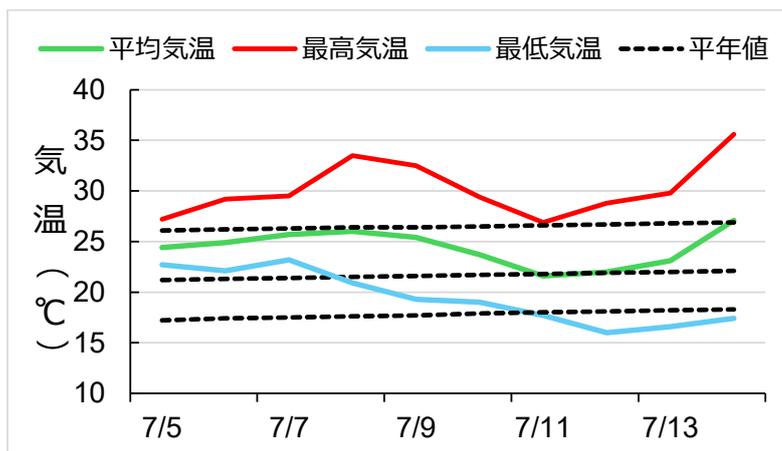
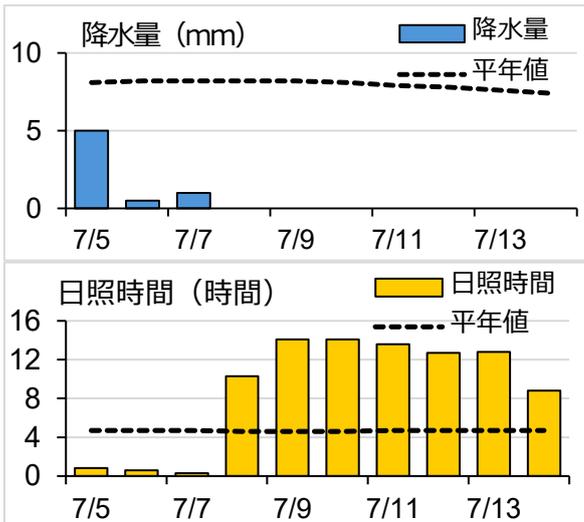


図1 気象経過図（アメダス鷹巣）



【気象経過】

- 7月5日～14日にかけて、気温は高くなりました。また、日照時間は多く、降水量は少なくなりました。
- 仙台管区气象台発表の1か月予報（7月10日発表）によると、向こう1か月の東北地方日本海側の天気は、気温は高く、降水量と日照時間はほぼ平年並と予想されています。

【生育状況】

- 7月15日現在の生育（あきたこまち：9地点平均）は平年と比べ草丈が長く、茎数が少なく、葉数が多く、葉色がやや淡くなりました。幼穂長の平均は3cmで、全ての調査地点で既に幼穂形成期を過ぎています。
- 前回調査に引き続き、**茎数が少ない状況**です。減数分裂期の追肥を検討してください。

【減数分裂期・出穂期の予測】

- 日平均気温から算出したあきたこまち（中苗）の出穂期は、**平年よりも6日程度早まる予測**（表2）となっており、今後の高温によりさらに早まることが予想されます。
- ほ場ごとの生育状況を確認し、次ページを参考に追肥の判断や水管理、病害虫の防除を行ってください。

表1 定点調査結果（7月15日）

	草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	葉数 (葉)	葉色
本年	70.9	487	11.7	40.1
平年	64.6	546	11.4	41.4
前年	70.1	566	12.0	44.2
平年比	110%	89%	+0.3	97%
前年比	101%	86%	-0.3	91%

※平年は過去10か年の平均値を示す。

※葉色はSPAD-502で測定した。

表2 あきたこまち（中苗）の減数分裂期及び出穂期の予測（アメダス鷹巣）

田植日	減数分裂期(平年値)	出穂期(平年値)
5/15	7/17(7/24)	7/27(8/3)
5/20	7/20(7/26)	7/30(8/5)
5/25	7/22(7/28)	8/1(8/7)
5/30	7/24(7/31)	8/3(8/10)

※7月14日以降は平年値で計算した。

2 減数分裂期の追肥判断

○茎数が少ないほ場が多く見られます。籾を充実させるために減数分裂期の追肥を検討してください。

○幼穂形成期以降、極端に葉色が低下すると、一穂粒数の減少や有効茎歩合の低下を招きます。生育量が不足している場合や葉色が低下している場合は、減数分裂期まで待たずに窒素成分で1.0～1.5 kg/10 a程度の追肥を行います。

表3 減数分裂期（13葉期頃）の理想生育量

	草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	葉数 (葉)	葉色 (SPAD)	生育量 (×10 ³)	栄養診断値 (×10 ³)
上限値	74	529	12.2	40	38.4	15.0
理想値	72	504	12.0	39	36.3	14.2
下限値	69	479	11.8	38	33.9	13.0

○減数分裂期に葉色が濃く草丈が概ね75 cm以上あるほ場では、倒伏する可能性があるため、追肥を控えて倒伏軽減剤の使用を検討します。

3 当面の水管理

○強めの中干しは根を痛めるため、亀裂が入る状態が継続しているようなほ場では直ちに入水してください。

○中干しを十分にできなかったほ場では、落水期間をやや長めとする間断かん水により地耐力を高めます。

○フェーン現象の際は湛水管理を行い、蒸散による水分の消耗を軽減します。

○減数分裂期から穂ばらみ期にかけて、日平均気温20℃（最低気温17℃）以下の日が続き、日照が少ない場合には障害不稔が発生するおそれがありますので、深水管理を行います。

○「あきたこまちR」はカドミウムをほとんど吸収しないため、出穂期前後各3週間の湛水管理は不要です。間断かん水を実施し、土壌を酸化的な条件に保つことで、根の伸長を促進しましょう。

○カドミウム含有米の発生防止対策地域で、「あきたこまちR」以外を作付しているほ場では、田面が空気に触れないように出穂期の前後各3週間は水田に常時水を張り、土壌表面を空気に触れさせない湛水管理を継続してください。

4 主要病害虫の防除対策 ～ドリフトに注意！～

※飼料用米も主食用米と同様に、病害虫防除を行ってください。

※生育が早まっているため、防除のタイミングを逃さないようにしましょう！

【いもち病】 ～多くのほ場で病斑が確認されています～

○全県的に平年よりも葉いもちの発生量が多く、拡大が懸念されるため、7月11日に病害虫防除所より「防除対策情報」が発表されています。管内でも既に病斑が見えているほ場があるため、ほ場の見回りを徹底し、病斑の早期発見に努めてください。

○病斑を発見した場合は、直ちに予防剤と治療剤の混合剤(ブラシン、ノンブラス等)を茎葉散布してください。その後、必要に応じてビーム剤等を追加散布します。

○7月下旬以降に上位葉で葉いもちの発生がある場合は、出穂15～7日前にコラトップ剤（粒剤・豆つぶ剤）、ゴウケツ/サンブラス粒剤または出穂直前と穂揃期にトライ剤、ビーム剤、ラブサイド剤のいずれかを茎葉散布し、穂いもちの発生を防ぎます。

◆農薬の使用回数に注意！

ラブサイド剤（ブラシン剤等含む）の成分である「フサライド」や、ビーム剤（ノンブラス剤等含む）の成分である「トリシクラゾール」の本田での総使用回数はそれぞれ3回以内となっています。農薬は使用する度に帳簿に記載し、総使用回数を超えないよう計画的に使用しましょう。

【斑点米カメムシ類】

- 出穂15～10日前まで、畦畔や農道、法面、雑草地等の草刈りを徹底し、斑点米カメムシの発生源を減らします。
- ノビエやホタルイなどのカヤツリグサ科雑草が出穂すると、斑点米カメムシ類が飛来してきます。ほ場内に雑草がある場合は、除草剤の使用時期に注意して除草を徹底してください。

【紋枯病】 ～一部ほ場で病斑が確認されています～

- 病害虫防除所による発生予報（令和7年6月24日発表）では、紋枯病の発生時期は
平年よりやや早く、発生量はやや多いと予想されています。前年収穫期に発生が多かったほ場は特に注意してください。
- 前年多発したほ場で、本病を対象とした育苗箱施用剤を使用していない場合は、以下の表を参考に、水面施用剤による防除を行ってください。
- 穂ばらみ期～出穂期の発病株率が15%を超える場合は、下表の茎葉散布剤を稲体の株元に到達するように散布してください。

種類	薬剤名（農薬成分回数）	散布時期	使用量・希釈倍数
水面施用剤	モンガリット粒剤 (1)	出穂20～10日前	4 kg
	リンバー粒剤 (1)	出穂15～5日前	
茎葉散布剤	バシタック水和剤75 (1)	出穂直前～穂揃期	粉剤・DL:3～4kg/10a 液剤:1,000倍 水和剤:1,000倍 [60～150L/10a] フロアブル:1,500倍 ゾル:800～1,000倍
	バシタックゾル (1)		
	バリダシン粉剤DL (1)		
	バリダシン液剤5 (1)		
	モンカットファイン粉剤20DL (1)		
	モンカットフロアブル (1)		
	モンセレン粉剤DL (1)		
モンセレンフロアブル (1)			

5 お知らせ

カドミウム汚染米発生を防止しましょう！！

- 「あきたこまちR」以外の品種を作付しているほ場では、出穂前後3週間の湛水管理を必ず実施してください。
- JA・主食集荷商業協同組合加入業者以外の集荷業者や消費者へ直接販売する場合は、出荷前にロット調査によるカドミウム分析を各自で実施してください。



詳しくは↑

令和7年度農薬危害防止運動（令和7年6月1日から8月31日まで）

近年、全国で農薬の使用に伴う周辺住民等に対する被害事例が発生しています。農薬の使用時は周辺への飛散防止に努めるとともに、農薬ラベルによる使用基準（単位面積あたりの使用量や希釈倍率等）の確認と使用履歴の記帳を徹底しましょう。

熱中症に注意！！

農作業中に熱中症になる人が増えています。こまめな休憩や水分・塩分の補給、帽子・空調服の着用などの対策で、熱中症を予防しましょう。

問い合わせはJAまたは農業振興普及課まで～次回発行は7月中旬頃～